
書 評 Book Review

タンチョウ そのすべて

正富宏之 著

北海道新聞社 2000年, 327頁, 2,500円 (本体価格)

「日本鳥類哀史」なる書物がもし編纂されたら、その主役を務めるのは大きな白い鳥たちだろう。トキ、コウノトリ、アホウドリ、タンチョウ・・・狩猟で迫害され、生息環境を圧迫され、いずれもこの日本で、悲劇の舞台へ追いやられてきた。どの鳥もある時期からは手厚い保護を受けてきたが、前二種にとっては既に手遅れで、悲劇のまま幕は降りた。現在も再導入に向け、飼育下で繁殖等の試みは続けられているが、日本産個体群が絶滅した事実は消せるものではない。一方、後二種においては奇跡的な復活劇が繰り広げられてきた。

著者は、タンチョウの復活を35年余見守り続けてきた。公的な個体数調査が初めて実施された1952年、北海道で確認された個体数は33羽、それが1999年には706羽に増えたのだから、約半世紀の間に20倍以上の伸びを示している。さぞかしご満悦だろう、と思うのだが、実はそうでもないらしい。生物種の保護はそれほど単純ではなく、成功というゴールはおそらくどこにもみつからない。

しかし、ひとまずタンチョウ保護の第一段階は成功したといっても間違いはあるまい。いずれも湿地や水辺で餌を採り、同様の減少過程をたどったのに、なぜトキやコウノトリは絶滅し、タンチョウはその危機を免れたのか。紙一重の運・不運とも思える分岐点が本書には記されている。

明治の時代、タンチョウの生息地である北海道の湿地は、大部分が水田へと姿を変えた。ただ東部の湿原だけは、低温と日照不足が稲作を阻み、ツルに安全な待避場所を提供した。海霧に覆われた深い湿原は、ヒトの侵入を妨げ、人知れずタンチョウの生命を守り続けた。一方、不幸なことに、トキやコウノトリは人目につかず生き続ける時を持たなかった。彼らはあまりにヒトに近づき、水田を採餌場所としていたために、農薬という毒物から免れることができなかった。既に個体数を減らしていた彼らは致命傷を負い、回復する術を持たなかった。もしタンチョウが北海道東部ではなく、石狩低地帯にのみ残っていたら、と著者は思いをめぐらせる。一面の水田地帯で餌を採り、トキやコウノトリと同じ運命を辿ったに違いない、と。「人との距離」、これこそが、狭く人口密度の高い列島で生きる生物の命運を左右している。周知のように、タンチョウの個体数が劇的に回復したのは、冬期間の給餌が果たした功績が大きい。しかし、ヒトがツルを手厚くもてなす以前、明治大正昭和初期を生き抜いたのは、人類と生活空間を異にして持ち堪えた彼ら自身の力だった。

細々と生き残った彼らの遁世時代は、道東を記録の大雪と寒波が襲った1952年に終わりを告げた。この年、もしツルがヒトの給餌を拒んでいたら、歴史はここで終わっていたかもしれない。以降、ツルは冬の食料をヒトに頼るようになり、ヒトはあたかもタンチョウの味方となり、「生活習慣を変え」てツルは応えた。

人為的給餌は、否応なしに野生動物とヒトとの距離を縮める。今では、冬の餌場だけではなく、営巣場所すら平坦と人の近くに持つ個体が現れている。個体数が増える一方で、湿地や水辺は減るばかりで収容力は上がっていないから当然の帰結かもしれない。既に、営巣地の混み合いがつがい間の争いを増やし、繁殖に支障を与える事例がみつまっている。回復し続けてきた個体数に住まいを提供するには、受け入れ先の質も大きさも不足し過ぎている。また、ヒトに迫害され、ヒトを恐れた世代はとっくに絶えていることも、ツルが俗化した一因と著者は考えている。人里近くでは、電線事故や交通事故の危険が増大し、農薬や有害物質の影響も免れないのだが、「人との距離」が近くなりすぎたタンチョウの将来を、著者は楽観視していない。

しかし、本来の原生的な生息環境が失われた北海道で大型鳥類を保護するには、ヒトに近づけるしか道は無かったであろう。ただ、我々はその成果に余りに長く安住しすぎてきたため、保護の第二段階である生息地保全の歴史がまだ浅い。1980年代以降、ラムサール条約登録湿地の指定や国立公園の設置により、漸く湿原の価値が認め

られつつある。今や釧路湿原を「不毛の地」とさげすむ人はいないだろう。著者による既刊「タンチョウ」（北海道新聞社 1977）と読み比べると、生息地保全への世の理解度には隔世の感がある。前者では、生息地の開発行為とそれを是認してきた有識者に対して、情け容赦ない舌鋒が浴びせられていた。その怒りと無念に満ちた文勢は、無慮慮なき輩読者の身をもすくませた。本書における柔らかな筆致は、著者にとっての20余年という時の蓄積もあろうが、何より、生息環境破壊の圧力が多少なりとも軽減されているためだろう。

それでも、開発行為が法的に制限されていない生息地は未だに多く、現生息地保全という第二段階の達成もおぼつかない。しかし、既に第三段階への展開、すなわち生息可能域を確保し、タンチョウの生息地を増やす措置が急務である。ヒトが将来の蓄えをするのと同じと著者は言う。残念ながら、かつての生息地、さらに新しい地域で生息環境を確保・復元する必要性はなかなか理解や協力が得られない。これは著者に言わせれば、「有名動物尊重論」が生んだ弊害である。ツルのような大型稀少種が「棲んでいない場所は価値がないから守らなくてもよい、という本末転倒論」が世にまかり通っている。百歩譲ってツルの偏重を正当化しても、給餌により冬期の生存率を上げ、個体数増加を遂げてきた以上、彼らの生息場所を確保するのは当然の責務のはずなのだが、「無名の生き物」に目を向け「自然の餌を供給し、ヒトへの直接的な依存を減らす」必要を著者は主張する。「給餌を通じてツルをヒトに馴れさせ、ますますヒトへ近づけさせるようと働いている今のベクトルを、少しでも彼ら本来の暮らしをもとに、自活・自立できる向きへ変える」ことがタンチョウ保護の最重要課題である、と。

確かに、現在の保護策は、熱心な給餌で個体数を増やす一方で、タンチョウの生息環境を略奪する開発行為を続けるという矛盾に満ちている。生息地の確保ができぬまま、餌を与えて観光客を喜ばし、冬期の生存率を上げて個体数を増やし続けても、タンチョウ保護にとってその意義はかつてより小さい。しかし、「ベクトルの向きを変える」ためには多少なりとも痛みを伴う選択が迫られる。ヒトとの距離を再び離そうとすると、まずは観光に悪影響を与えかねない。これに対しては、現状からやり方を変えても観光と矛盾しないと著者は言う。数の多さで人目を引くのではなく、「雪上で優雅に群れ舞うツルの姿を眺めただけでは見えない」ツルのこと、自然のこと、ツルやヒトが抱える深刻な課題を知って貰える方法があるはずだと。確かに現在の観光は、例えて言うなら本書を手にとり、写真だけを眺めて満足する読書法(?)に似ている。著者自身による全編カラーの生態写真は美しく、それだけでも十分ツルに接した気にさせてくれる。しかし、写真の解説に目を通し、さらに全327ページの本文を読み図表も理解すると、遙かに多くのことを学ぶことができる。

しかし、もっと大きな痛みも予測される。もし本気でツルとヒトの距離を離そうとするなら、生息地確保と同時に給餌量の削減や、給餌場所の分散も当然検討されねばならない。それは少なくとも短期的には、とくに若齢個体の冬期間の生存率を下げることもつながりかねない。個体の生存の機会を奪わずに彼らをヒトから遠ざけるにはどのような給餌をすべきなのか。そもそも、既に現在の個体数は、今の北海道における収容力を超えているのか。我々は結局、何羽まで北海道のタンチョウを増やそうとするのだろうか。

著者による研究成果の蓄積がいかに大きいか、それは本書が十分伝えてくれる。しかし、タンチョウ保護が抱える課題を考えると、科学的に解決できるだけの知見はまだ不十分なこともよくわかる。幼鳥の個体識別が実施されているのは生息域の一部であるし、個体群の次世代を担う若鳥の行動についてもわかっていないことが多い。生息環境の解析もまだ緒に就いたばかりと言ってもいい。保護のベクトルを変え、タンチョウをより自活させるためには、自然状態での彼らの生態を、科学的手法を駆使して次々に剥がしていく次世代の研究者の存在も欠かせないだろう。「本当にツルは夜、寝ているのだろうか？」と厳冬期に一晩中ツルのねぐらで観察を続けるような物好きな研究者は、もう二度と現れないだろうが・・・

と、僭越な私見も含め、タンチョウ保護の課題について字数を費やしすぎた。本書は保護・辺倒の説教臭い啓蒙本ではない。むしろその醍醐味は、タンチョウの生活史や形態、分布・・・まさに「そのすべて」を広く網羅していることにある。導入部となる分類や形態に関する記述は簡潔でしかもわかりやすい。四季を追って綴られるタンチョウの生活史では、随所にツルの行動が詳細に記述されている。このエソグラムが、不思議な程まったく退屈な記載とならない。写真と挿し絵の効能も大きい。著者の豊かな文学的素養と持って生まれた(?)サービス精神の賜物だろう。本来の意味を損なわない限界まで専門用語を平易な言葉へ言い換え、客観性を損なわない限界まで擬人化と感情移入が施されている。結果として本書は読者層を選ばない。

「私のような研究者の役割は、少し離れた位置からツルの置かれている状況をなるべく客観的に捉え、その情報を地域の人々へ提供し、問題解決の一助にしてみようことである。」と語るとおり、著者は俯瞰的な視点でタンチョウを捉え、この書を綴っている。しかし、けっして研究の一対象物と割り切っていないこともひしひしと伝

わってくる。距離を保ちつつも、その視線は愛情に満ちて暖かい。絶滅の危機に瀕した生物を対象に選んだ研究者にとって、保護活動家へ移行するのはたやすく、むしろ、対象と距離を保ち続けることこそ難しいものだが、著者のバランス感覚は見事と言う他ない。ツルに対する自分の位置を著者はこのように述懐する。「はたから見れば、クレイジーなツルマニアに見えるのかもしれないが、ネコやイヌが好きでたまらないという動物好きとは違う。私はその人たちが対象へ抱くほどに、ツルへのめり込んではない気がする。それでも、すでに人生の終盤にかかり、長年のツルとの付き合いで、彼らを通して自己を見ることが、他のことより容易に接続する回路であることも確かといえる。だから、ツルを語るのは、己を語るのと多分に重なることもいたしかたあるまい・・・」

これが著者とツルの距離だろう。近いとか遠いとか、主観とか客観とかいう次元ではなさそうだ。時間の長さだけでもない。こんな風に付き合える対象物としての他者を持つ人生は相当幸せなものではないだろうか。

しかし、その幸せがどこか哀しいのは、ツルがかつての「九阜に棲む鳥」に戻れないことを著者が誰よりも良く知っているからだ。ヒトはツルの運命に深く介入し、もはやツルもその関係を断ち切れない。「ツルを全くの野生種として、しかも湿原の最上位消費者としてその王国に封じられるのは、現状ではもはやできないと諦めるべきである。そして、それをもたらした責任を、我々ヒトは永劫背負っていかなくてはならない。同じ地球上に住む生命体としての責務である。」と。

かつて、尊厳と孤高に包まれていたであろう生き物の、譲歩と寛大さに満ちた現在形を見るのは悲しい。その姿と深遠な瞳には、我々が彼らに負う罪の大きさを突きつけられているような気さえする。その悲しみを知った以上、野生生物の研究は、研究者自身の知的欲求を満たすだけでは完成しない。この深い罪から目を背けず、この罪を広く世に知らせ、そして世の誰よりも深くこの責を負うことを著者は観念している。

こんな研究者をお抱えに持つタンチョウの幸運さは、ここで改めて言うまでもないだろう。

早矢仕 有子（帯広畜産大学野生動物管理学研究室）